

Title	ザイン・アッ=ディーン・イブン・ムズヒルをめぐる「夢」： 奇跡譚にみえる後期マムルーク朝有力官僚の人的コネクション
Sub Title	The dream account of a prominent bureaucrat of the late Mamlūk period : Zayn al-Dīn ibn Muzhir's miraculous story as reflecting his human connections
Author	太田 (塚田), 絵里奈(Ōta (Tsukada), Erina)
Publisher	三田史学会
Publication year	2021
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.90, No.1 (2021. 9) ,p.57 (57)- 73 (73)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20210900-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルをめぐる「夢」

——奇跡譚にみえる後期マムルーク朝有力官僚の人的コネクション——

太田(塚田)絵里奈

序

ザイン・アッ＝ディーン・アブー・バクル・イブン・ムズヒル Zayn al-Dīn Abū Bakr ibn Muḥammad ibn Muzhir al-Qahiri al-Dimashqi al-Anṣari al-Shaḥī (八三一～八九三／一四二八～一四八八年) は、エジプトのナズィイル・アル＝イスタブル(スルターン厩舎監督官 *naẓir al-istab*)、ナズィイル・アル＝ジャイシュ(軍務庁長官 *naẓir al-jaysh*) などの国家の要職を歴任し、カーティブ・アッ＝スイッル(文書庁長官 *kātib al-sirr*) に登用された後は二六年間という類例のない期間にわたり同職を保持した、マムルーク朝末期の最有力文民官僚の一人である⁽¹⁾。

大部な名士伝記集『九世紀の人々の輝く光 *al-Daw' al-*

Lamī' il-l-Ahl al-Qarn al-Tasi'』の著者として名高い歴史学者サハールウィー Shams al-Dīn Muḥammad al-Sakhāwī (八三〇～九〇二／一四二七～一四九七年) の『カードイー列伝統編 *al-Dhayl 'alā Raf' al-Isr aw Baḥiyat al-'Ulamā' wa'l-Ruṭab*』は、このザイン・アッ＝ディーンに関する最も重要な叙述史料と位置づけられる。サハールウィーはザイン・アッ＝ディーンのメッカ・メディナ巡礼に帯同したほか(八七一／一四六七年)⁽²⁾、メディナにザイン・アッ＝ディーンが創建したムズヒリヤ学院 *al-Madrasa al-Muzhiriyā* (八九三年シャウワール月／一四八八年九一一〇月頃完成) に滞在歴を有し(九〇二／一四九六～九七年頃)⁽³⁾、ザイン・アッ＝ディーンの手掛けた学術振興事業における受益者の一人であった⁽⁴⁾。

『カードイー列伝統編』においては、ザイン・アッ＝デ

イーンの系譜・経歴のみならず、域内諸都市で手掛けた寄進と善行、三度にわたる巡礼行、さらには両者の長期にわたる学的交流に裏付けられた人物像が詳述されており、量・質ともに他の同時代史料を圧倒する情報が得られる。⁽⁵⁾

なかでも異彩を放っているのは、ザイン・アッ・ディーンをめぐる「夢」(حلم⁽⁶⁾)を見たというウラマーに関する記述である。前近代アラブ社会においては、可視的領域と不可視的領域という二元的世界観が共有されており、夢は不可視的世界と邂逅するための主要な手段であった。夢や幻視は唯一神の意思を反映していると理解されたため、それらは単なる個人の体験を超え、社会で広く共有されるべき情報として、年代記等にも頻繁に記録されている。⁽⁷⁾

このようなイスラーム的文脈における夢は、通常預言者ムハンマドもしくはすでに他界した人物が出現することにより権威を付与された。⁽⁸⁾夢の発現時に存命であり、かつ超自然的能力で知られる聖者やイスラーム諸学への貢献が認知されたウラマーではない人物にこのような「奇跡譚」が伝わることは非常に稀と思われる。本稿では、一五世紀末に活躍した一人の文民官僚にまつわ

る「夢」の記述とその解釈に着目する。ザイン・アッ・ディーンとその奇跡譚に登場するウラマーとの関係を精査し、当該時代の有力官僚が有した人的ネットワークの一端を復元する。そしてザイン・アッ・ディーンのウラマーに対するパトロネージが、彼に関する史料記述に与えた可能性を検証することで、マムルーク朝期の官僚研究における新たな視座を提示したい。

一．ザイン・アッ・ディーンをめぐる「夢」の一致

『カーディー列伝統編』のザイン・アッ・ディーン伝において、サハーウィーは、「時を同じくして生じた素晴らしい事件」として、自らの見た夢について詳述している。⁽⁹⁾それによれば、サハーウィーのほか、三人の大カーディーがザイン・アッ・ディーンをめぐり、同じ内容の夢を見たという。時期に関しては「彼の体調が悪化した直後」とある。ザイン・アッ・ディーン健康状態の悪化が史料上確認されるのは八八二年ラビーウ・アル・アウワル月／一四七七年六月七月のアレキサンドリア視察時が最初であるが、夢を見たウラマーの一人であるイッズ・アッ・ディーン・アル・ハンバリー⁽¹⁰⁾ [ʿIzz al-Dīn Ahmad al-ʿAsqalānī al-Hanbalī] (八七六／一四七一

年歿)の手記によれば、八七五年シャバーン月の末／
一四七一年二月頃という。

以下にサハーウィーが見た夢の内容を引用する。

「夢の中で」私(サハーウィー)は海を中心に据えられた、いと高く、美しい玉座へと向かっていった。そしてこの荒波の中、いかにしてその脚が固く据えられているのか、そしてこのような高みに達することが出来るのは誰なのかと不思議に思い、目が覚めた。それから大カーデイーのバドル・アツィデーン・イブン・アル＝ブルキーニー al-Badrī ibn al-Bulqīn、大カーデイーのバドル・アツィデーン・アル＝イツズイー・アル＝ハンバリー al-Badrī al-'Izzī al-Hanbalī の両名もまた、この日の前日、この夢とは同じ内容を彼(ザイン・アツィデーン)に語ったことを知った。そこで私と両名は集まり、各々からその内容を聞いた。これは珍しく、奇妙なことであった。¹¹⁾

この直後、サハーウィーは、ハンバル派大カーデイーのイツズ・アツィデーン自らが記したという、ザイン・アツィデーン・イブン・ムズヒルをめぐる「夢」

ン・アツィデーンをめぐる夢の記述が続けている。以下はサハーウィーが引用するイツズ・アツィデーンの手記である。

私(イツズ・アツィデーン)は、(八)七五年シャバーン月の末、ファジュルの刻(早朝)に、見知らぬ運河のほとりにいた。その水位は非常に高く、家に居ながらにして手ですくって飲めるほどであり、人々は「豊富な水量を」大いに喜んだ。それから私は家を出て、少し歩くと、木々の茂った広大な館に向かつて開かれている門を見つけた。その中央には居間 (diwān) があり、「その噴水の水は」運河へと注がれているのであった。そしてそこにいたのは、高貴なるカーティブ・アツィスィツルのザイン・アツィデーン・ムズヒル閣下 al-Maḥarr al-Ashrat al-Zaynī Muzhir であった。彼がいることで、世の中は輝く光に満ちていた。そしてあらゆる場所が彼の発する芳しい言葉の香りで包まれていた。彼は息子とともにその場(居間)に着座していた。私は挨拶のために中に入ることを躊躇し、門のところに立ちすくんだ。そして許可なく立ち入ることはあまり

にも不躋ではないかと畏れた。そこで戻り、自分自身に言った。「彼らのため、私の代わりとなる」訪問の証拠となるような「二連の詩を記そう」と。何を記すべきか懊悩した末、ふと突然「以下の詩が」頭に浮かんだ。

神があなたに長寿をお与えくださいますように
あなたが望むままに、常に愉しみに満ちたものとなりますように

それからまた思案したもの、今度は難儀した。そこで目が覚め、作った二つ目の詩が以下である。

誰も比肩することのできない

その手で恩恵と導きを与える唯一の存在
誰一人として彼に例えられる者はいない⁽¹²⁾

サハーウィーはこの手稿を読んだ後、イツズ・アツッ・ディーン本人から同様の内容を聞いたという。⁽¹³⁾そしてさらに、「同様に、この伝記の主人公に関するイツズ・アツッ・ディーンの言葉はワリー・アツッ・ディーン・アル

アスユーティー al-Walawī al-Asyūī に先んじた」、すなわちシャーフィイー派大カーディーのアスユーティー Wafī al-Dīn Ahmad ibn Ahmad al-Asyūī（八一三〜八九一/⁽¹⁴⁾一四一〇〜一四八六年）も同様の夢を見た続けている。

サハーウィーの夢における「荒波」とは、財政難と外圧に苦しむ王朝のメタファーであると考えられ、その指導者たり得る人物は誰かという問いかけに対し、ブルキーニー、イツズ・アツッ・ディーン、アスユーティーの三人の大カーディーが等しい答えを与えている。四名の夢の一致という奇跡譚の体裁をとっているが、ザイン・アツッ・ディーンこそが困難な時代において人々に恩恵を与え得るという、彼の指導性を称揚する記事として理解されよう。この夢の一致が生じた時期、ザイン・アツッ・ディーンは病床にあつたというが、その病自体が「彼がいかに偉大であつたかを示すものであつた」、すなわち彼の信仰を試す神の恩寵であつたとサハーウィーは理解する。⁽¹⁵⁾ザイン・アツッ・ディーンが神の試練を受けるなかで生じた奇跡に関する記述は、「人々に恩恵と導きを与える唯一の存在」という物語の結末が、神に由来する真理であることを仄めかしているのである。

二、「奇跡譚」を構成するウラマーとの関係

このような「よき夢」は敬虔なムスリムに与えられる神の恩寵として、日常生活において適用・遵守すべき助言が含まれると考えられた。⁽¹⁶⁾ それでは、ザイン・アッ＝ディーンを王朝の指導者と結論づける「助言」を構成するウラマーの顔ぶれは、何を意味しているのだろうか。

ザイン・アッ＝ディーンのの学術振興事業における直接的な受益者であったサハールウィーは言うまでもなく、他の三人に対してもザイン・アッ＝ディーンは少なからず影響力を行使し得る立場にあったと考えられる。以下、各々のザイン・アッ＝ディーンとの関係を整理していくことにしよう【付表：「夢」発現前後の大カーディー職就任者】。

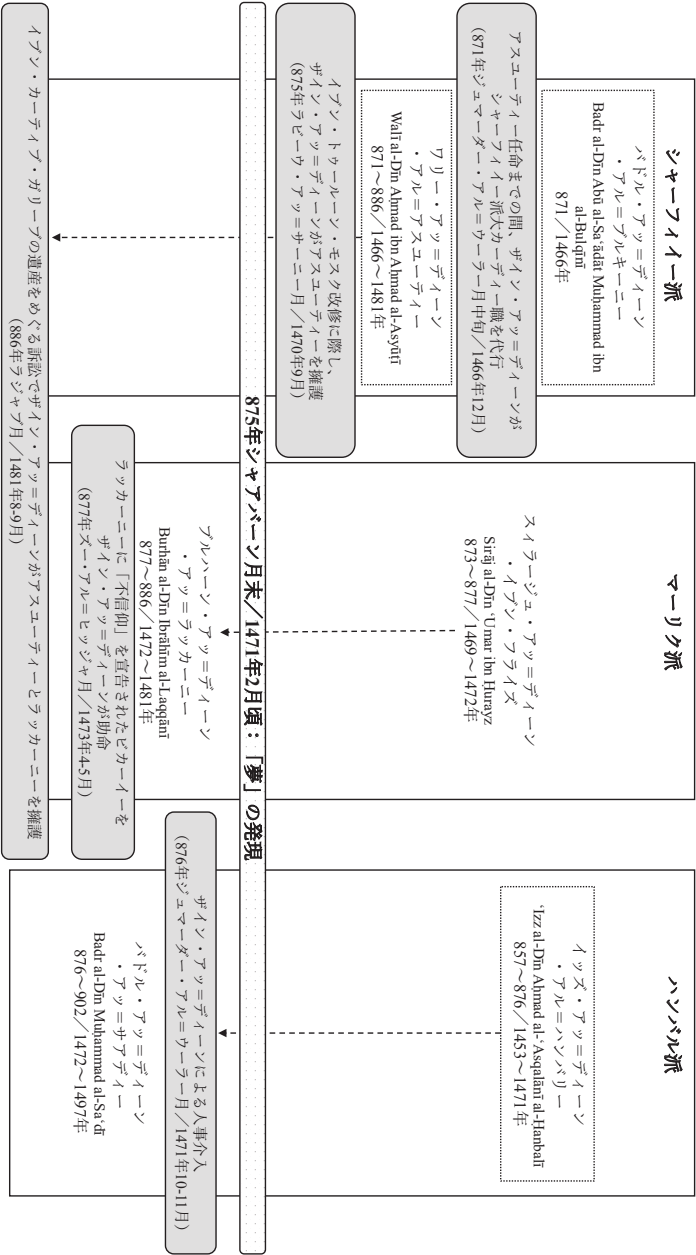
バドル・アッ＝ディーン・アル＝ブルキーニー Badr al-Dīn Abū al-Sādāt Muhammad ibn al-Bulqīnī (八九〇／一四八五年歿) にとつて、ザイン・アッ＝ディーンのの義父アラム・アッ＝ディーン・アル＝ブルキーニー Alam al-Dīn Saīth al-Bulqīnī (七九一／八六八／一三八九／一四六四年) は大叔父にあたる【系図：ムズヒル家・ブルキーニー家】。ザイン・アッ＝ディーンの実母ハデ

イージャ Khadija ibna Amir Hāj ibn al-Baysari (八七八／一四七四年歿)⁽¹⁷⁾ は、夫であるバドル・アッ＝ディーン Badr al-Dīn Muhammad ibn Muzhir (七八六／八三二／一三八四／八五／一四二九年、ザイン・アッ＝ディーンのの父、バドル・アッ＝ディーン二世) の死後、シャーフィイー派の最有力法学者であったアラム・アッ＝ディーンと再婚した。⁽¹⁸⁾ サハールウィーによれば、イーナール期(一四五三／一四六一年)にアラム・アッ＝ディーンがシャーフィイー派大カーディーのの地位にとどまり得た要因の一つは、ハデイージャがイーナールの正妻(khāwand al-kubra) ザイナブ Zaynab ibna Hasan ibn Klāss Bak (八八四／一四七九／一八〇年歿) に重用されたためであった。⁽¹⁹⁾ ブルキーニーは生涯において七度シャーフィイー派大カーディーに就任しているが、六度目の就任期間(八五七年サファル月／八六五年シャウワール月／一四五三年三月／一四六一年七月)はイーナールの在位期間とほぼ一致する。⁽²⁰⁾

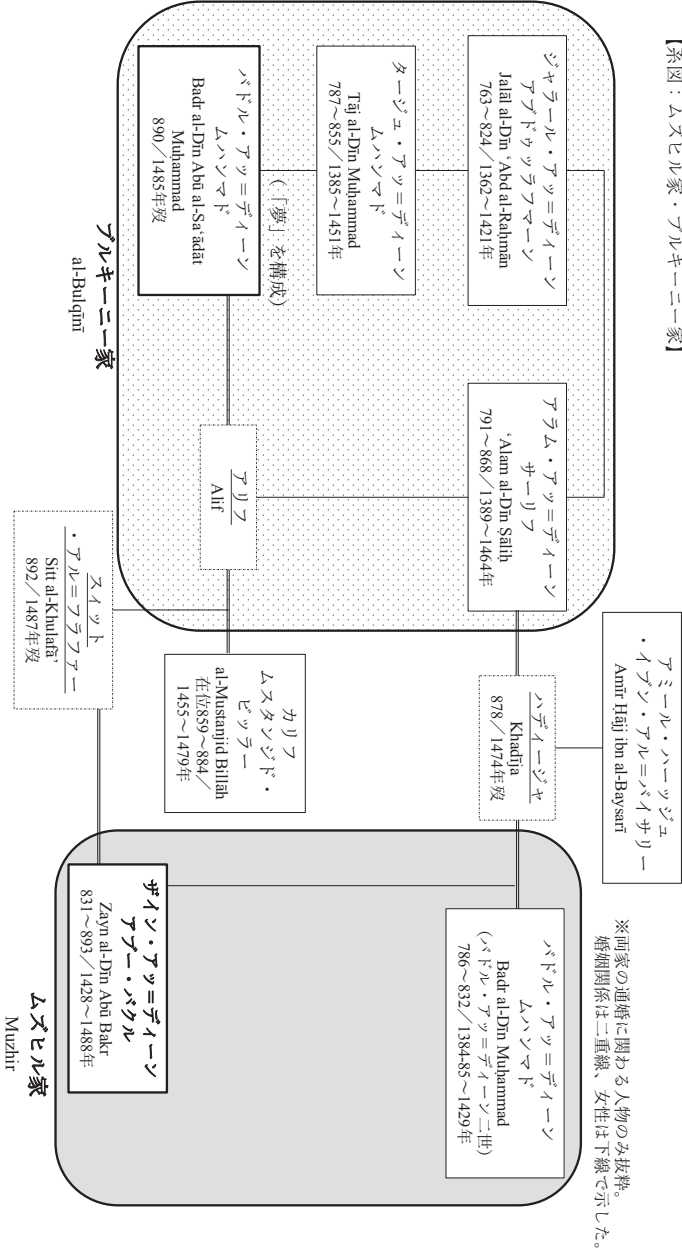
父タージュ・アッ＝ディーン Taj al-Dīn Muhammad (七八七／八五五／一三八五／一四五一年) の死後、バドル・アッ＝ディーンは大叔父の庇護のもと法学教育を受けつつ、そのナードゥイブを務めた。またバドル・アッ＝

【付表：「夢」発現前後の大カーデー職就任者】

※「夢」に言及される人物は点線で囲った。
年代は在職期間を示す。



【系図：ムズヒル家・ブルキーニー家】



デインはアラム・アツ＝デインの娘アリフ Alif と結婚した。⁽²⁴⁾ 重要と思われるのは、彼のサイド・アツ＝スアダー修道場における管財人 (nāzir khirgāh Sa'id al-Su'ada) 職の獲得である。同職には、八六三年ラジヤブ月／一四五九年五月にザイン・アツ＝デインが就任していたが、その翌年(八六四年ズー・アル＝カアダ月／一四六〇年九月)、バドル・アツ＝デインが約五〇〇デイナールの賄賂 (badh) で手に入れたといふ。⁽²⁵⁾ 同職に対する実質的な任免権行使したアラム・アツ＝デインが、バドル・アツ＝デイン、ザイン・アツ＝デイン双方の姻戚かつ後見人であったことは注目に値する。

八七一年ムハッラム月／一四六六年八月、バドル・アツ＝デインは七〇〇デイナールでシャーフィイー派大カーデイーの地位を手にしたが、八七一年ジュマダー・アル＝ウラー月月中旬／一四六六年一二月、経験不足と素行の悪さを理由に、わずか四カ月で解任された。⁽²⁶⁾ 彼に代わってワリー・アツ＝デイン・アル＝アスユーティイーが任命されるまでの期間、ザイン・アツ＝デインが臨時にカーデイーとして裁定を下し、法に関する意見書 (makātib) を提出した。⁽²⁷⁾ ムラティー・Abd al-Bāsit

al-Makātib (八四四～九一〇／一四四〇～一五一四年) によれば、この際、ザイン・アツ＝デインは空席となったシャーフィイー派大カーデイーの候補者として名を挙げられたというが、当時のスルターン・フシユカダム(在位一四六一～一四六七年) は、ザイン・アツ＝デイン自身を大カーデイーに任命するのではなく、大カーデイーたちに対する発言権を彼に委ねたといふ。⁽²⁸⁾

以後ザイン・アツ＝デインは、各法学派の大カーデイーに対し、任免を含む影響力を強めていった。このことは「夢」の登場人物の一人であるワリー・アツ＝デイン・アル＝アスユーティイーとの関係においても示されている。八七五年ラビーウ・アツ＝サーニ月／一四七〇年九月、月例の会議で、カーイトバーイ(在位一四六八～一四九六年) はイブン・トゥールーン・モスクのキブラが南に大きく逸れている問題に言及した。本来この事案はシャーフィイー派大カーデイーであるアスユーティイーの管轄にあったが、スルターンはザイン・アツ＝デインに発言を求めた。ザイン・アツ＝デインが、大カーデイーはすでにこの問題を認識しており、ミフラーブを改め、それ以外についても然るべき方角に正す予定であると発言したことで、アスユーティイーは譴責を

免れた⁽²⁷⁾。また八八六年ラジャブ月／一四八一年八月、イブン・カーティブ・ガリーブ Sharaf al-Dīn Muṣā ibn Yūsuf ibn Kātib Gharīb (八三三～八八二／一四二九—三〇(一四七七年)の遺産をめぐる訴訟について、カーイトバーイはアスユーティーとマリーク派大カーディーのラッカーニー Burhān al-Dīn Ibrāhīm ibn Muḥammad al-Laqqānī (八九六／一四九〇年歿)に遅滞している理由を問いたしたが、この際もザイン・アッ＝ディーンはアスユーティーらを擁護する発言をしたという⁽²⁸⁾。夢の一致が生じたというヒジュラ暦八七五年シャアバーン月は、まさにザイン・アッ＝ディーンがイブン・トゥールン・モスクのミフラーブ改修についてアスユーティーを擁護した直後である。

夢の記録を残したというイッズ・アッ＝ディーンは、約二〇年にわたりハンバル派の大カーディーの地位にあった。彼とザイン・アッ＝ディーンの明確な接点は史料からは辿れないが、この夢とほぼ同時期に、ザイン・アッ＝ディーンがハンバル派の人事において決定的な影響力を行使したことは史料中に明示されている。

八七六／一四七二年ジュマダー・アル＝ウラー月／一四七一年一〇—十一月、イッズ・アッ＝ディーン

ン・アル＝ハンバリーが約八〇歳で歿すると、カーイトバーイはブルハーン・アッ＝ディーン・イブン・ムフリフ Burhān al-Dīn Ibrāhīm ibn Muḥīṭ (八一五～八八四／一四二二—三〇(一四七九年)を任命するため、ダマスクスに使者を送ったが、闘病を理由に受諾できないとの返答があった⁽²⁹⁾。そこでザイン・アッ＝ディーンはイッズ・アッ＝ディーンの子であったバドル・アッ＝ディーン・アッ＝サアディー Badr al-Dīn Muḥammad al-Saʿdī (九〇六／一四九七年歿)を大カーディーの職に就任させるための算段をつけ、カーイトバーイはサアディーをハンバル派大カーディーに任命した。イブン・イヤース Zayn (Shihab) al-Dīn Muḥammad ibn Iyās (八五二～九三〇年頃／一四四八～一五二四年頃)によれば、「当時ハンバル派に属する者たちのなかでサアディーより優れた人物はいたが、諸運は異なっていた」。大多数の人々は、「髭に白髪がみられない」若輩のサアディーには過ぎたる待遇と考えており、当時の詩人たちは彼の抜擢を揶揄したという⁽³⁰⁾。

この記述は、同派ウラマーに適任者がいたにもかかわらず、前任者と近しい立場にあった若手を起用するというザイン・アッ＝ディーンの意向が学派の総意に優越し

たことを示している。この時期、ザイン・アッ・ディーンが、ハンバル派に加え、マールク派大カーディーの判決を覆す政治力をも有していたことは、八七七年ズー・アル・ヒッジャ月／一四七三年四月五月、カイロの主要ウラマーを二分したイブン・アル・ファリード論争において、前述のマールク派大カーディー・ラッカーニーのもとで処刑の危機に立たされたクルアーン注釈学者ビカーイー *Burhan al-Din Ibrāhīm al-Fiqāī* (八八五／一四八〇年歿) を、ザイン・アッ・ディーンが自らの権限で助命したことからも伺える。⁽³¹⁾

サハーウイーは「彼(ザイン・アッ・ディーン)に対し、カーディー、その他の役職について発言する権利が委ねられ、その結果、彼「自身」が任命を行なうようになった」と述べる。⁽³²⁾ 官職の任免権は最終的にはスルターンにあったが、ザイン・アッ・ディーンはその意思決定に多大なる影響を及ぼしただけでなく、彼独自の権限で任免権を行使し得る立場にもあった。⁽³³⁾ ザイン・アッ・ディーンは同時代の官僚としては例外的な規模での慈善事業を手掛け、多くのウラマーを直接的なパトロネージ下に置いていた。⁽³⁴⁾ それに加え、要職の任免が有力者による推薦や執り成しによって左右された時代⁽³⁵⁾に、広範な人事

権を掌握することで、首都における自身の権力基盤の拡充を図ったと考えられる。

このようなザイン・アッ・ディーンの政治的・社会的影響力の源泉は、第一に八九三／一四八八年にザイン・アッ・ディーンが死去するまでの二〇年間にも及ぶカーイトバーイとの緊密な主従関係にあったといえよう。ザイン・アッ・ディーンはカーイトバーイに対する数々の政治的執り成しを成功させているが、その対象はウラマーや官僚ら文民エリートのみならず、マムルークにも⁽³⁶⁾及んでいた。

その一例を詳述すれば、八八二年シャアバーン月一日／一四七七年一月二二日、視察のためダマスクスに入城したカーイトバーイは、同地の名士たちを召集し、シハープ・アッ・ディーン・アン・ナブルスィー *Shihāb al-Din Ahmad al-Nābulusī* の死に対する責任を問いただした。シハープ・アッ・ディーンは父ブルハーン・アッ・ディーン *Burhān al-Din Ibrāhīm* とともに、スルターン個人のワキール(法定代理人 *wakil al-sultān*)として、それぞれダマスクスとカイロにおける財貨徴収に携わり、八八一／一四七六年にはシハープ・アッ・ディーン⁽³⁷⁾の過酷な取り立てが原因で、彼の殺害を目的とし

たダマスクス市民による暴動が生じていた。⁽³⁷⁾この際尋問を受けたダマスクスのナーズイル・アル＝ジャイシユ、ムワッファク・アッ＝ディーン・アル＝アッバースイー Muwaffaq al-Din al-Abbasi al-Hamawi (八九一／一四八六年歿)⁽³⁸⁾と商人のクトゥブ・アッ＝ディーン・アル＝ハラビー Qutb al-Din al-Halabi (九〇〇／一四九五年歿)⁽³⁹⁾、ナジyum・アッ＝ディーン・アル＝ハイダリー Najm al-Din Ahmad al-Khaydari (八六二／一四五七—五八年生)⁽⁴⁰⁾に対し、カーイトバーイはシハーブ・アッ＝ディーンが死に至ったことを激しく叱責した上、関係者全員の殴打を命じたが、ザイン・アッ＝ディーンが御前にひれ伏し、ターバンを外してカーイトバーイの手に接吻したところ、カーイトバーイは全員に対する命令を撤回したという。⁽⁴¹⁾

結

一五世紀のウラマーに対するパトロネージが歴史叙述にもたらした影響を分析したブロードブリッジは、マムルーク朝期のウラマーの多くが、スルターンやアミールとの相互依存的関係の只中にあつたと述べている。⁽⁴²⁾ウラマーは個人的、職業的コネクションが織りなす密なる網の目、すなわち有力者によるパトロネージとそれをめぐる

る競争の中で生きていたのであり、パトロネージ獲得の可否がウラマーの物質的・経済的成功を左右したという結論に何ら異論はない。だがそこで俎上に載せられていたのはウラマーとマムルークの関係であり、パトロネージの主体、客体を問わず、官僚についてはこれまで十分な注意が払われてこなかった。⁽⁴³⁾その理由の一端は、マムルーク朝期のウラマーに対するパトロネージが宗教施設の建設などを通じた職位 (mansab) の提供を中心に論じられ、⁽⁴⁴⁾かつ軍人及びその家族が施設寄進者の大半を占めていたことで、規模や数で劣る文民行政官による寄進が軍人の縮小版として捉えられていた点に求められよう。⁽⁴⁵⁾だが、元は外来の非ムスリムで一代限りの権力者であった軍人と、官僚、すなわち世代交代を前提とした土着の有力ムスリムによるパトロネージの論理や在り方を同列に論じることができない。また、ウラマーに対するパトロネージは、寄進・善行によって創設された職や手当の支給のみならず、職の斡旋や減刑の請願などの執り成しを通じても及び得た。それが軍人のみならず官僚によっても担われていた点に、十分な注意を払う必要があるだろう。

「夢」を見たという三人の大カーデイーのいずれにつ

いても、ザイン・アッ・ディーンの慈善事業との直接的な関連性は確認されない。だが「夢」の出現当時、ザイン・アッ・ディーンは首都の各法学派に対し、大カーデイーの任免権、そしてその決裁に優越する政治力を行使していた。学派内の反発を押し切って任命されたサアデイーも、ザイン・アッ・ディーンに対して肯定的な立場をとったことは想像に難くない。史料中のザイン・アッ・ディーンは総じて理想的官僚として語られているが、彼が任官や執り成しに際して広範な決定権を有したことが、同時代ウラマーによる歴史叙述や彼をめぐる人物描写に影響を及ぼしたのは確かであろう。

他方、高位官僚にとって、いかに多くの有力ポストに発言権を行使し得るかという問題は、婚姻や経済的保護を通じた同時代エリート間のネットワーク拡大と並ぶ、自身の生存戦略の一部でもあったと位置づけられる。任官や執り成しなど、文書史料の範疇から外れた形態でのパトロネージに基づいた官僚の人的コネクションを総括するには、今後個別具体的なプロフィールの集積が必要となるが、ザイン・アッ・ディーンの影響力が同僚である他の有力官僚のみならず、ウラマー、さらには軍人にまで及んでいた事実を鑑みれば、マムルーク朝期のパト

ロネージは、軍人から文民へと一方的にもたらされたのではなく、文民から文民、さらには文民から軍人へも及び得るような、より多面的かつ複合的な実態を有していたのではないだろうか。今後はパトロネージ手段の多様性を前提に、有力者個々人のネクサスを紐解いていく必要がある。

【付記】

本稿は二〇二〇年度住友生命保険相互会社「未来を強くする子育てプロジェクト／女性研究者への支援（スミセイ女性研究者奨励賞）」及び東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「中東・イスラームの歴史と歴史空間の可視化分析―デジタル化時代の学知の共有をめぐって」に基づく研究成果の一部である。

【史料略号】

Bada'i'

Ibn Iyās, *Bada'i' al-Zuhūr fī Waqā'i' al-Duhūr*, 6 vols., Cairo: Dār al-Kutub wa'l-Wathā'iq al-Qawmiyya bi'l-Qāhira, 2008.

Daw'

al-Sakḥawī, *al-Daw' al-Lāmi' bi'l-Aḥl al-Qarn al-Tāsī'*, 12 vols., Cairo: Maktabat al-Quds, 1935–1937.

Dhayl Raf'

al-Sakhāwī, *al-Dhayl 'alā Raf' al-Isr au Bughyat al-'U-lamā' wa l-Ruwāḥ*. Cairo: al-Hay'a al-Miṣriyya al-Āmma lil-Kitāb, 2000.

Ḥawāḍith al-Zamān

Ibn al-Himṣī, *Ḥawāḍith al-Zamān wa Wafayāt al-Shaykh wa l-Aqrān*, 3 vols. Beirut: Dār al-Nafāis, 2000.

Inbā' al-Ḥaṣr

al-Sayrafi, *Inbā' al-Ḥaṣr bi-'Abnā' al-'Aṣr*. Cairo: al-Hay'a al-Miṣriyya al-Āmma lil-Kitāb, 2002.

Majma'

al-Malaṭī, *al-Majma' al-Mufannan bi-l-Mu'jam al-Mu'an-wan*, 2 vols., Beirut: Dār al-Bashāir al-Islāmiyya, 2011.

Nayl

al-Malaṭī, *Nayl al-Amal fī Dhayl al-Duwal*, 9 vols., Beirut and Sayda: al-Maktaba al-'Asriyya, 2002.

Nujūm

Ibn Taghrī Birdī, *al-Nujūm al-Zāhira fī Mulūk Miṣr wa l-Qāhira*, 16 vols., Cairo: Dār al-Kutub wa l-Wathāiq al-Qawmiyya bil-Qāhira, 2005-2006.

Ta'rīkh al-Buṣrayī

al-Buṣrawī, *Ta'rīkh al-Buṣrayī*, Damascus: Dār al-Ma'mūn lil-Turāth, 1988.

Tuḥfa

al-Sakhāwī, *al-Tuḥfa al-Laifā fī Ta'rīkh al-Madīna al-Sharīfa*, 2 vols., Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1993.

Uns

al-'Ulaymī, *al-Uns al-Jalī bi-Ta'rīkh al-Quds wa l-Khalīl*, 2 vols., Amman: Maktabat al-Muḥtasib, 1973.

Wajiz

al-Sakhāwī, *Wajiz al-Kalam fī al-Dhayl 'alā Duwal al-Islām*, 4 vols., Beirut: Mu'assasat al-Risāla, 1995.

【辞典類】

Encyclopaedia of Islam, Second Edition
Bearman, P. (et al.), *Encyclopaedia of Islam, The Second Edition*. Leiden: Brill, 1954-2005.

Medieval Islamic Civilization

Mertt, Josef W. (ed.), *Medieval Islamic Civilization: An Encyclopedia*, 2 vols., New York and London: Routledge, 2006.

【図版】

付表：「夢」発現前後の大カーディー職就任者系図：ムスビル家・ブルキーニー家

註

(1) ザイン・アッ＝ディーンの経歴は拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像：ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズビルの家系と経歴」『史学』八三／二（三三〇、二〇一四年）、五〇～五八頁、官職の就任歴は同七六～七九頁を参照されたい。

- (2) *Dhuyf Raf*, pp. 482-484.
 - (3) *Tuhfa*, vol. 1, p. 36.
 - (4) また「サハーウィー」はザイン・アッヒディーン歿後(八九三年ラマダーン月／一四八八年八月以後)もカイロのムズヒリーヤ学院において滞在、あるいは何らかの手当を受給するなどの繋がりを持っていた可能性が高い。ビジュラ暦八九〇年代の同学院をめぐる「サハーウィー」は教授の変遷(例えて *Wajiz*, vol. 3, p. 1032, 1094)「滞在者の動静」(*Wajiz*, vol. 3, p. 1166)などを具に記している。
 - (5) *Dhuyf Raf*, pp. 469-488.
 - (6) *ルナヤー* (ru'yā) 𐤒𐤍 𐤓𐤕𐤕「夢 (dream)」を意味するフルム (ḥulm) とマナーーム (manām) とは異なり、覚醒時にも発現し得ると定義される (Kinberg, L., art. "Dreams and Dream Interpretation", in *Medieval Islamic Civilization* (vol. 1, pp. 214-216)。
 - (7) Frenkel, Yehoshua, "Dream Accounts in the Chronicles of the Mamluk Period," in Louise Marlow (ed.), *Dreaming Across Boundaries: The Interpretation of Dreams in Islamic Land*, Cambridge: Harvard University Press, 2008, pp. 203-204, 214. イブン・ハルズーンは夢判断学 (taḥrīr al-ru'yā) を「イスラーム法の学問」に属す」と述べる(イブン・ハルズーン(森本公誠訳)『歴史序説』岩波文庫、二〇〇一年「三巻」三三〇頁)。
- 彼によれば、「夢判断が預言の光明に輝いている学問であるのは、預言と夢とが互いに関係があり、夢が預言的啓示の一部を占めているからである」という(同三三八頁)。

- 夢解釈にあたつては、数学、法学、語源学、固有名詞学等、あらゆる分野において膨大な知識を持つ必要性があると考えた (Fahd, T., art. "Taḥrīr al-Ru'yā", in *Encyclopedia of Islam, Second Edition*)。
- (8) Kinberg, art. "Dreams and Dream Interpretation".
 - (9) *Dhuyf Raf*, pp. 486-487.
 - (10) カイト・バーイのアレキサン德里ア行幸に随行したザイン・アッヒディーンは、侍医を伴ってより身体的負担の少ないナイル河経由で向かったが、アレキサン德里アから移動できないほど健康状態が悪化した (*Badā'i*, vol. 3, p. 130; *Nayl*, vol. 7, pp. 190-191)。
 - (11) *Dhuyf Raf*, p. 486.
 - (12) *Ibid.*
 - (13) *Ibid.*
 - (14) *Dhuyf Raf*, p. 487.
 - (15) *Dhuyf Raf*, p. 486.
 - (16) Kinberg, art. "Dreams and Dream Interpretation".
 - (17) 彼女の「バイサリー」および「スバハ」は、バイバルス一世期(一二六〇ー一二七七年)の最有力アミールの一人であったバズル・アッヒディーン・バイサリー Badr al-Dīn Baysarī ibn 'Abdullāh al-Shamsī al-Sāliḥ (六九八／一二九九年歿)に由来する (*Daw'*, vol. 12, p. 25)。
- バイバルスの乳兄弟でもあったバイサリーは、バイバルスと同じくアイユーブ朝スルタンのサリフ(在位一二四〇ー一二四九年、麾下のマムルークとなり、バイバルスの即位後は百人長まで昇進した) (*Nuṣūṣ*, vol. 8, p. 185)。

(18) Daw', vol. 12, p. 25. ウラマー名家としてのブルキーニ一家は、Petty, Carl F., *The Civilian Elite of Cairo in the Later Middle Ages*, Princeton: Princeton University Press, 1981, pp. 232-240 及び伊藤隆郎「一四世紀末―一六世紀初頭エジプトの大カーディーとその有力家系」『史林』七九／三号、一九九六年、三三三―三四二頁で詳細に論じられている。

(19) Daw', vol. 12, p. 25.

(20) ハデーシヤの経歴及びムズヒル家の存続戦略において彼女が果たした役割は、Ota-Tsukada, Erina, "The Muzhir Family: Marriage as a Disaster Mitigation Strategy", *Orient*, 54, 2019, pp. 135-136 を参照されたい。

(21) ハのアリフの娘はザイン・アッ＝ディーンの妻の一人であるスイット・アル＝フラファー Sitt al-Khulafa' (八九二―一四八七年歿) だが、バドル・アッ＝ディーンとの間に血縁関係はない。

(22) Bada'i', vol. 2, p. 362; Daw', vol. 9, p. 98; *Dhayl Raf'*, p. 334; 伊藤「一四世紀末―一六世紀初頭エジプトの大カーディー」三三三九頁。

(23) Bada'i', vol. 2, p. 442; Daw', vol. 9, p. 99.

(24) Bada'i', vol. 2, p. 445. 彼の経歴は、伊藤「一四世紀末―一六世紀初頭エジプトの大カーディー」三三八―三三九頁を見よ。

(25) Bada'i', vol. 2, pp. 445-446.

(26) *Majma'*, vol. 1, p. 194.

(27) だが実際には、ハの問題は長らく放置されていた上、

ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルをめぐる「夢」

以後も何ら対策が取られることはなかったという (*Nayl*, vol. 6, pp. 429-430)。

(28) 諸官庁の書記やウスターダール(執事長 *ustadar*)を務めたイブン・カーティブ・ガリーブの生涯は、同時代の歴史家たちによって、不正の限りを尽くして領民を苦しめたと総括されている (*Bada'i'*, vol. 3, p. 127; *Daw'*, vol. 10, p. 192; *Nayl*, vol. 7, p. 188)。ハの訴訟の詳しい経緯は拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像 (二)：ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルの公務と慈善」『史学』八四／一―四号、二〇一五年、一六一―一六二頁を見よ。ザイン・アッ＝ディーンがアスユーティー、ラッカーニーの両者を擁護する発言をしたところ、カーイトバーイは突如三人の罷免を告げたが、ザイン・アッ＝ディーンのみが復職を許された (*Bada'i'*, vol. 3, p. 183; *Nayl*, vol. 7, p. 293)。

(29) イブン・ムフリフの伝記は *Daw'*, vol. 1, p. 152 を見よ。

(30) Bada'i', vol. 3, pp. 64-65. サアデーの歿年は *Bada'i'*, vol. 3, p. 362 に基づく。

(31) Bada'i', vol. 3, p. 89.

(32) *Dhayl Raf'*, p. 481.

(33) ウラマー Muḥr al-Dīn 'Abd al-Rahmān al-'Uyaymī (九二八／一五二二年歿) の『エルサレム・ムブロン史 *al-Uns al-Jalīl bi-Tarīkh al-Quds wa'l-Khalīl*』においては、各学派の大カーディーの地位をはじめ、エルサレムでもザイン・アッ＝ディーンが広範な人事権を掌握していたことが明示されている。八八二年ジュマダー・ア

ル＝アーヒラ月／一四七七年九月一〇月、アクサー・モスクのハティープにファトフ・アッ＝ディーン・アル＝カルカシヤン・ディー Fath al-Din Abu al-Hazm al-Qalqashandi (原文 al-Qargashandi) が就任し、シャマル・アッ＝ディーン・イブン・ガニム Jamāl al-Din ʿAbdullāh ibn Ghānim がサラヒービヤ学院 al-Madrasa al-Salāhiyya のシャイフに就任したが、それらの斡旋はザイン・アッ＝ディーンが行なったという (Uns. vol. 2, p. 319)。

- (34) ザイン・アッ＝ディーンのウラマーに対する経済的パトロネージの諸様態は、拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像 (二)」一四八―一五六頁及び「後期マムルーク朝有力官僚と聖地：ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルの巡礼とハラマインにおける慈善」『史学』八八／二号、二〇一九年、三三―三四頁を参照された。
- (35) Ota-Tsukada, "The Muzhir Family", p. 128.

- (36) 軍人に対する執り成しについては、例えば八七五年ラビーウ・アル＝アウフル月二九日／一四七〇年九月二五日、カーヒラの警察長官 (wālī) を殴打したマムルークに科された一万八〇〇ディナールに及ぶ罰金刑の再査定 (Inbāʾ al-Hisr, p. 216) や、八七八年ズー・アル＝ヒッジャ月／一四七四年四月五月、ダワダーールのヤシユバクの暗殺を画策したアクタシュ al-Aqtash を腰斬刑から救ったことが挙げられる (Badāʾi, vol. 3, p. 94; Nāyī, vol. 7, pp. 91-92)。

- (37) Majmaʾ, vol. 1, p. 218. ワキール・アッ＝スルターンは

スルターン直属の財務官であり、売官や財産没収など、任免を通じたスルターンの財貨徴収を担っていた(五十嵐大介『中世イスラーム国家の財政と寄進：後期マムルーク朝の研究』刀水書房、二〇一一年、一三七頁)。ナブルスィー親子については、五十嵐前掲書、一三八頁を見よ。

- (38) Taʾrīkh al-Basrawī, p. 129.
- (39) Taʾrīkh al-Basrawī, p. 163 によれば、有力商人として統治者のもとに頻繁に出入りし、特にハナフィー派諸職保有者との関わりが深かったという。

- (40) Dawʾ, vol. 2, p. 184.

- (41) Hawādith al-Zamān, vol. 1, p. 137. サハーウィー及びマラティーによれば、シハープ・アッ＝ディーンは八八二年ラビーウ・アル＝アウフル月 (Majmaʾ, vol. 1, pp. 217-219) もしくはアービラ月 (Dawʾ, vol. 1, pp. 191-192) 月／一四七七年六月七月に死亡した。この両名の記述においては、シハープ・アッ＝ディーンはスルターンの命により逮捕された後、自殺を試みたとされ、やや異なる状況が伝えられる。

- (42) Broadbridge, Anne F., "Academic Rivalry and the Patronage System in Fifteenth-Century Egypt: al-Aynī, al-Maqrīzī, and Ibn Ḥajar al-ʿAsqalānī", *Mamlūk Studies Review*, 3, 1999, p. 85.

- (43) プロローグブリッジの議論で多用される「マムルーク的パトロネージ Mamlūk patronage」という分析概念において、ウラマーにパトロネージをあたらし得る主体に

官僚は含まれていない。

(44) Chamberlain, Michael, *Knowledge and Social Practice in Medieval Damascus, 1190-1350*, Cambridge: Cambridge University Press, 1995, esp. chapter 3.

(45) Broadbridge, "Academic Rivalry and the Patronage System", p. 95.